
空、晴れあがった2 ～せつなさの贈りもの～

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空、晴れあがった２　くせつなさの贈りもの

【Nコード】

N2762G

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

前作、「空、晴れあがった」の続編です。片想いに悩む中学二年生の恵理は、勇気を奮って、想いを寄せる真治君のメルアドを手に入れる事に成功したけれども・・・。

第一章 練習試合

急に強い風が吹いてきて、私は思わず隣に座っている明日香に体を寄せた。

「寒いねー」

明日香が首に巻いた茶色いマフラーを握りながら言う。

「ホッカイロ持ってきたよ、はい」

と、私はダッフルコートの両方のポケットからホッカイロを出して明日香に手渡した。

「用意が いい のね。 どうでも いい けど、 あんた 顔 が 白 い を 超 え て 青 白 くな っ て る わ よ」

うるさいと言って、グラウンドのほうへ目を向ける。整列が始まったので、もうすぐキックオフだ。

「始まるよ」

「みんながんばってー」

明日香がよく通る大きな声で言う。釣られて、ユツコら他の女子も声援を送る。私も、叫ぼうと思ったがタイミングを失って、手を振る事しか出来なかった。ピーツと主審の人が笛を鳴らし、我が梅山中学校と隣の区にある清明中学校の地区対抗のサッカーの親善試合が始まった。

「練習試合みたいなものだけど、うちの中学のグラウンドでやるから良かったら応援に来てくれよ。最近、西野はサッカーに興味あるんだろ」

と、真治君に言われて、応援に来ないわけがない。もっとも、最近サッカーやJリーグに興味を持ち始めたのは真治君のせいなんだけど、それは内緒の話。明日香らにも声をかけて、12月の痺れる寒さの中を、クラスの女子数人で集まって、サッカー部の練習試合の応援をしにきた、ということ。

真治君はMFで、チームの真ん中で試合をコントロールする役目を

しているのだと、買った「一からわかるサッカー入門」を読んだり、直接話して知った。でも、正直それが難しいのかとか、そういうことはよくわからない。そもそも私はサッカーボールを蹴ったことすらない。

「おつ、真治君がドリブルしてる」

明日香が感心したようにいう。

「あつ、あつ」

私は声を上げた。相手チームの選手が肩をぶつけて真治君の邪魔をした。ボールは真治君を離れ、相手の選手がドリブルで持っていたってしまった。

「今の反則じゃないの？」

「審判が笛を吹かないからセーフみたいよ」

明日香がしたり顔で言う。私はぶうつと頬を膨らます。そうこう見てる間に、相手のFWがシュートを打った。ゴールの枠を超えて飛んでいってしまったが、結構強烈なシュートだった。内心すごいと思った。と思ってたら、また相手がシュートを打った。今度はGKががちりキャッチした。

「なんか、相手チームのほうが強そうよ」

「うそー、そんな事ないよ、うちが勝つよ、だって、真治君がいるのよ？」

明日香はクスクス笑いながら、はいはい、そうよねといった。その後、でもサッカーは11人でやるのよ、と何かの名セリフみたいなことを言う。

「ああっ！」

と応援にきているユキが叫んだ。ゴールを決められてしまったのだ。落胆する私たち。真治君を見ると、悔しそうに歯を食いしばっている。力の差は、見ている素人の私たちにもなんとなく分かってしまう。と言うことは、試合をしている本人達にはもっとわかるだろう。今度は、うちのチームが相手コートに攻め込んでいる。一人の選手が足を取られて転んだ。審判が大きな音で笛を鳴らす。

「今のは反則だからフリーキックよ」

「あつ、蹴るのは真治君だ」

相手の反則なので、ゴールの手前30m辺りから、地面に置いたボールを蹴る事が出来る。真治君は助走をつけて大きく足を上げてボールを蹴った。ボールはすごい速さで放物線を描いて、見事に相手のゴールへ突き刺さった。

真治君は大喜びで仲間と肩を叩き合っている。私も思わず明日香の手を取って喜んだ。

でも、喜びはここまでだった。前半が終わって、結果は4-1。このままじゃボロ負けになってしまふのは見えている。休憩をしている真治君たちも余り元気が無い。私たちも、沈んだ感じで見守るしかなかった。吹く風も余計に寒く感じる。家から持ってきたホット紅茶をみんなで飲んだ。

後半が始まった。敵も味方も必死に走っている。本当にサッカーと言うスポーツはしんどそう、と思った。私なら途中で倒れるような気がする。一つのボールを追いかけるのがそんなに楽しいかな、よくわからないな、と思った。こけたら痛そうだし、手は使えないし。私は試合そのものよりもただひたすら真治君だけを見る事にした。指示を出したり、マークについたり、真治君が、

「MFは司令塔なんだ」

と言っていた意味は分かった気がする。また点を取られた。頭をかきむしる真治君。冬なのにすごい汗をかいている。その汗が蒸発して、オーラみたいになっている。迫力あるね、と明日香に言った。ねー、かっこいいね、と明日香は答えた。

やがて試合は終わった。8-2と言う点差で、惨敗と言っているかもしれない。肩をすくんでグラウンドを去る真治君たち。でも、戦い抜いた、と言うような満足感は見えてくる。真治君が私たちのほうに向かって手を合わせてペコツと頭を下げた。せっかく応援に

来てくれたのに負けてすまない、と言う意味だろう。そして、その後変な顔をして、肩をあげて、外人が困った時みたいな仕草をした。その様子がとてもおかしかったので、クラスの子らはみんな爆笑した。こんな真治君が見られただけでも、応援に来た甲斐はあったかもしれない。早速私は携帯電話を取り出して、何事か打とうと思うのだけれども、相変わらずすぐには思いつかず、家に帰ってから打つ事になるのだった。ふと、視線を上げた。チームのみんなは更衣室に引き上げるところだが、真治君の横顔が見えた。そんな真治君の顔は初めて見た。まなざしが悔しさと怒りに震えていた。まるであらぶるオオカミのようで、思わず私は息を飲んだ。それは、私の知っている真治君じゃなかった。生まれて初めて、本気で怒る男の人を見たのかもしれない。そばに行って何か声をかけてあげたかった。でも、それは出来ず立ちすくむしかなかった。この瞬間、グラウンドには私と真治君しかいなかった。私はいつまでも、去っていく真治君の背中を見つめていた。

第二章 聖なる夜の来る前に

空には太陽が照っているものの、そのエネルギーを全くと言っていいほど実感出来ない今日はクリスマス・イブ。私は、小さな頃は、この日はサンタにプレゼントをもらう日、大きくなってからは、親に何がしかのクリスマスプレゼントを貰う日だと思っていたし、甘いクリスマスケーキと手に余る大きさの七面鳥を食べ残すのも当然だと思ってた。でも、インターネットで「クリスマス」を調べてみると、どうもそうではなかった事がわかった。クリスマスと言うのは、イエス・キリストと言う名前の神様の誕生を祝う日らしいと知った。英語で書くと、Christmas キリストのmasで、masはミサ、降誕のお祭りと言う意味らしい。驚きの発見だったので、明日香にメールで知らせると、そんな事も知らなかったの、と返ってきたので私はちよつと落ち込んだ。気を取り直して、コンポに入っている讚美歌集を聞く事にした。合唱部に入った時に、お父さんがこう言うのも聞いてみればいい、と買ってくれたものだ。

称えよ 救い主イエスを 奇しき愛をば述べ
崇めよ 御使いと共に 尊き主の御名をば
か弱き我ら羊を 飼い主イエスは抱く (聖歌 484 称え
よ救い主イエスをより)

キリスト教、というものの自体は知っていたものの、およそ内容には興味もなかったし、外国の宗教、でしかなかったのだけれども、クリスマスがイエス・キリストの誕生日だと知って、なんとなく愛着が湧いたような気がする。クリスマスツリーだって、サンタクロースだって、みんなイエス様のためのものなのか、と思うとなんとか面白くなった。一体、どんな人なのだろうか？ふと私はそういう興味が湧いた。お父さんの書斎には何かしら、そういう聖書とか

そっち系の本があるかもしれない。お父さんは昼間はどこかに行っているはずなので、いつものように無断で書斎兼寝室に入り込む。かすかにタバコ臭い。本棚に目をやる。あ、ある。「イエス・キリストの生涯とその思想」めくってみると、ちよつと難しそうだ。一瞬、戻そうかと思ったけども、冬休みのさなか、外に出る気もないし、背伸びして読むか、と思って、その本を持って自分の部屋に戻った。一人っ子は読書をよくする傾向にある、ってテレビの特集で言ってたけど、それは当たってるかもしれない。兄妹がいれば暇な時にゲームをしたりするものね。寒いので、だらしないかもしれないけれど、蒲団に潜り込んでページを開き始める。読んでみると余り難しくない。イエスという人は大工だったが、ある時信仰に目覚め、ヨハネという人の教団に入るが、やがて、師ヨハネの弾圧と教団の解散の後、自ら厳しい修行をし、新しい教えの教示を受け、その新しい教えを広め始める。その教えが、古い教え、ユダヤ教を信じる人々や、ローマ帝国の怒りを買ひ、最後には十字架に張りつけられて死んだ。が、死後復活し、それを見た弟子達の布教により、キリスト教は広まっていった、らしい。なるほど、そう言えば十字架にかけられた男の人の絵を見た事があるけれども、それがイエス様なのか。ほーっ、ふーん、と思った。それが書いてあるのが聖書、バイブルなのか。あっ、と思った言葉がある。

私は新しい戒めをあなた方に与えましょう。お互いに愛し合いなさい。

あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈りなさい。

すごい、と思った。特に、あなたの敵を愛せ、なんて無茶な教えだ。そんなことできない、と思わず私は被りを振った。私には「敵」なんて、今のところいないけれども、あんまり合わないな、と思う子はいら。その子を愛せと言われても、愛せない。いや、待てよ、と思った。私は、「愛している人」なんているのかしら、とふと思

った。まず、お父さんとお母さんの顔が浮かんだ。愛しているかしら？どうも微妙だ。次に明日香の顔が浮かんだ。どうも違う。さっきのメールを思い出すと軽く敵意すら感じる。では・・・真治君は？少し該当するような気がする。ああ、愛って、恋愛の事なのか。おぼろげに腑^ふに落ちた。もう一度ページを見る。お互いに、敵すらも、愛しなさい、か。やつぱりすごい教えだ。何故イエス・キリストが世界中で誕生日を祝われているのか、分かったような気がする。要はいい事を言った人なのか。でも、それって、みんながみんな出来ないような気もする。今の私に出来るのはせいぜい恋愛の愛だけだろうな。と、一人納得した私は、今考えた事を日記に残す事にした。と同時に、今日の夜に、真治君にクリスマスメールを贈ろう。知ってた？今日はイエス・キリストの誕生日なんだよ、愛し合いなさい、って教えた人の生まれた日なんだよ、って。窓の外はもうほのかに薄暗い。闇が迫り来る前に、私は自分の希望の灯を灯すことにしよう。早速私は携帯を取り出した。

第三章 合唱曲

年が開け、新年がやってきた。今年のお年玉はなんだか少なかった。お母さんに文句を言つと、

「不景気になつてきてるからしょうがないのよ、みんなお金がないの」

なんて言われて、私は頬を膨らませた。そう言えば、テレビのニュースなんか不況がどのと言つていたっけ。と、一応納得した。「それより恵理、最近ちよつと太つてきたんじゃないの」

と、お雑煮をさかに口に入れながらお母さんが言う。えっ、と私は焦った。

「そ、そうかもしれない。そう言えばスカートがちよつときつくなつてたような」

今口に入れたおせち料理の蒲鉾を思わず出そうとしたら、お母さんは、女の子は太る時期があるのよ、と言って可笑しそうに笑った。私はその後、すぐにお箸を置いて、洗面所にある体重計に乗った。ぎよつ、3kgも増えている。思わず鏡を見る。頬の辺りが明らかに肉付きが良くなつてしまっている。張り切つてお雑煮を何杯も食べた事を後悔した私は、ともかく運動をしなければ、と思い、慌てて自転車に飛び乗つて、そこらをサイクリングする事にした。

やがて、新学期が始まつた。中学校の教室にはまともな暖房器具がない。僅かに、電気ストーブもどきが置いてあるだけなのだが、寒くて仕方ない。私のように色が白いと、あたかも雪女のような風貌と化してしまう。いつもポケットにカイロを入れているが、殆ど効果はない。

「寒いよ寒いよ凍え死ぬ」

と言いながら明日香がくつついてきた。放課後なので合唱部に向かう。

「今の練習曲いいよね、これが上手に歌えたら全国合唱コンクールに出場できるかもね」

「うーん、男子のほうが駄目だからねえ。女子は上手いんだけど」

明日香が言う事はわかる。うちの合唱部の男子はそもそも真面目にやる気がない。上手い下手以前だと私も思うけど、明日香のようにはつきりは言えない。ふと、明日香が考え込んだ。

「どうしたの？」

と聞いても何も答えないので、話題を変えた。

「今の『樹氷の街』ってさ、失恋の歌だよね」

「そうよね、よく読んだら主人公と言うか、失恋した女性の視点の歌詞だよ」

「私は 別れた人を 懐かしむ想い っていうところが好き。でも男子だけのパートなんだよね」

「はいはい、あと 私は 温かい人の声を聞いた って言うことが盛り上がるよね」

「どんな人があんないい曲作るんだろうね」

「小室達哉みたいな人じゃないの」

と、明日香が茶化す。小室達哉とは、一世を風靡しながら、現在は借金に苦しんで詐欺をしたとかニュースで報道されていたアーティストだ。

「そんなわけないしー。でも作詞作曲できたら素敵よね」

などと話しているうちに部室に着いた。みんな中央の電気ストーブにへばりついていた。

新しい光の中で 私はさわやかな青い空を見た

新しい光の中で 私は暖かい人の声を聞いた

アルトの部分をお腹に力を込めて私は歌っていた。いつからか、歌には感情を込めたほうが喉が鳴るような気がする。

炎のように 樹氷の林を抜けて 冷たく閉じた人の心の扉を叩く
炎のように 扉を開く 扉を開く

歌い終えた。軽い達成感がある。顧問の中村先生もそれなりに満足そうだが、男子に注文をつけて、男子だけ歌いだす。何気なく少し離れたソプラノの明日香のほうを見た。じっと、誰かを見つめている。男子の誰かを？誰だろう。ひょっとして……。なんて想いが私をかすめた。機会があれば聞いてみるか、と思った。

校舎を出ると、外は既にとても暗く、真冬の風は頬に痛い。ちょっと太って正解だったかも、などと思いながら、グラウンドを見ると、真治君がシュート練習をしていた。顔つきは見えないが、必死なのが伝わった。私の視線を感じたのか、目が合った。

「西野！バイバイ」

とだけ言ってくれた。私も手を振って、たぶん大きな声でバイバイ、と言ったはずだったが、聞こえたか自信はない。

「いいねー、あんた幸せそうで」

と、横で明日香がガムを噛みながら言う。

「でももうすぐまた席替えするかもよ」

「あら、それは不幸せな話ね」

そという明日香の横顔に、さっき思ったことを言おうか、と思っただけども、止めた。本人から言ってくるのを待とう。

「もうすぐバレンタインね・・・」

と明日香が、一人呟いた。私もその事を思うと、少し鼓動が早まった。真治君には当然渡すべきだろうし、渡したい。けれども、そうした場合、恋愛感情がばれてしまう。ばれた上に、別に西野の事なんてなんとも思っていない、などと言われたら私は泣くに違いない。明日香も特に喋らずに、二人は淡々と空に星が輝きはじめる時間の帰り道を歩いていくのだった。

第四章 St・Valentine・Day前夜

2月某日、日曜日。明日香が家に遊びに来た。お母さんは明日香の事が好きなので張り切って紅茶やケーキを持って私の部屋に入り込んでくる。が、今日は大事な話があるので、早々に追い出すと、お母さんは何よなによとか言いながら出て行った。とは言え、なんとなく空気を読まれた気もした。何しろ来週はバレンタインデーだし、私はお母さんに言っ、て、お年玉をいくらか銀行から降ろすように頼んでおいたから。

「いいけど、何に使うの？」

と聞かれて、CDを買うの、と言った私はたぶん目が平泳ぎ気味だったに違いない。ともかく、お母さんが階下へ降りていく音を確かめ、私はまず明日香に聞かねばならぬ事を聞いた。

「ねえ、明日香はさあ。バレンタインあげる相手、実はいるよね？」
「やっぱり知ってたんだ。わかるもんなんだね」

と、明日香は隠し事がばれた、と言わんばかりに舌を出して笑った。

「すぐに言ってくればいいのに」

「いや、だって、自分でもまだはつきりわからないんだもん」

普段の明日香とは別人のようににはかんで下を向いて話す。こんな明日香はめったに見れるものではない。あたかも普段と立場が逆転したかのように、私が明日香に色々と質問する事になった。

「ケイジ君、だよ。合唱部の」

「うん・・・」

「背が高くていいよね、ほとんど話した事ないけど頼もしそうで」
「そう思う？あかね、こんな事があったのよ」

今年の冬休みのある日、明日香はお母さんと車でショッピングモールへ買い物に行った。そこは海岸沿いであって、景色がとても廣大できれいなところだ。波止場に面した大きなガーデンや灯台もある。

り、地元の人たちがよく集まる場所で、お母さんはコンタクトレンズを買いにいき、暇なので明日香は隣の本屋の外側の棚の本を立ち読みしていた。すると、車椅子に乗った人やってきた。それも4人ほどで、介護している人は7人ぐらいいた。その内の一人がケイジ君だった。明日香には気づかなかったが、明日香は気づいた。車椅子にはほほえみの会と言うような名前が書いてあり、雰囲気からするとボランティア団体のようだった。休みの日に障害者の車椅子を押しているのか。それとも家族のかな。明日香はそんな事を考えて、声をかけるか迷ったが、なぜかそこを離れて母のいるコンタクトの店に入ってしまった。自分がとてもちっぽけに感じたの、と明日香は言う。

「私は人のために何かしたことなんてないでしょ？ケイジ君がとても大きくて立派に感じたよ。」

「なるほど、あの人そんな事してるんだ、えらいね」

「まだあるのよ」

ケイジ君は二つ横のクラスなので、たまに廊下ですれ違う事ぐらいはある。ある日明日香がふと中を覗くと、一人の子がプロレスごっこのようなものでいじめられていた。あー、あのもやしか、ぐらゐに明日香が思って通り過ぎようとすると、そつと寄っていつて止めた男の子がいた。それがケイジ君だとは最初わからなかった。なぜなら、顔が憤怒に燃えており、かつ余りにも静かな振る舞いだったから、いじめてる相手も一種血の気が引いたみたいな顔になったのがわかった。明日香はドアにへばりついて一部始終を見ていた。かつこよすぎた、と思った。

「あの人、目立たない感じだけど、優しさや思いやりを持った超イケテル人なんだ、ってわかった」

私にも意外だった。合唱部にいる時はただ歌っているだけの存在感の薄い人なのに。

「人ってわからないものねえ。そんなに男らしい人だったんだ。ふーん。ふーん」

私がいきりに感心しているのを見て、明日香はわが意を得たりと言ふ顔をして、

「と言ふわけで、チョコをあげようと思ってるんだけど、そもそも私のことなんて眼中にもないだろうね」

「そもそも恋愛に興味のある人ではないのでは」

こうして二人、密議をこらすのであった。窓の外ではさすがに寒さを吹き飛ばすように健気に鳴いている。2月の寒空の下で、おそらく無数の恵理と明日香が来るべき日にどうやってチョコを渡すかと考えを巡らせているに違いない。

手作り、と言ふ発想を手間がかかる、自信がないと言ふ理由で却下した私たちは、買って渡し、それに手紙を付ける事で一致した。そこで、善は急いで、早速都心へ出て、デパートの地下階の食品街、通称デパ地下でチョコを買う事にした。明日香が購入していたカントウウォーカーによると、高嶋屋の地下がお洒落なチョコがたくさん売っているらしい。電車を降りて、高嶋屋につくとびっくりした。とんでもない人ばかりだ。

「下の階にどうやって降りるのよ」

「あそこにエスカレーターがあるみたいだけど・・・」

そこへ辿り着くまでが既に大変だったが、地下一階に下りるともつとすごかった。回りはみんな大人の女性ばかり。みんな来週に控えたバレンタインデーのためにチョコを買いに来たのだろう。

「満員電車みたいね」

「去年のプールを思い出すねえ。あの時もすごかったよね」

「あつ、あれよ、載ってたお店は」

ゴディーバ、と言ふ名前のそのお店もすごい人ばかりだ。これじゃ、商品自体売り切れちゃうんじゃないか、との危惧すら感じる。なんとか商品を表示しているディスプレイに辿り着き、見てみると、お値段もなかなか素晴らしい。私が目を見詰めていると、店員さんと目が合った。綺麗な人で、さすが百貨店は店員も一流だ、なんて

思っていると、忙しいだろうに、私にニツコリ微笑みかけてくれて、この商品がよく売れていますよ、と教えてくれた。見ると値段も手ごろだし、男の人が見ても抵抗のなさそうな青の箱に入っている。私はこれを買う事に決めた。

「明日香、私はこれにする」

「あ、それいい！私もこれにする」

さっきの美しい店員さんに注文すると、贈り物ですよ？と確認して、あっという間に上品な紙袋に入れて渡してくれた。目線が「がんばってね」と言ってくれているように感じたのは気のせいじゃないと思う。私と明日香は嬉しくなって、またぞろラッシュアワーの駅のホームばりの人ごみの中を、泳ぐように歩いた。せっかく買ったゴディバの袋が傷まないように胸に抱えていた。なんだか、とてもとても大事な物を守っているような気持ちでした。ようやく百貨店の外へ出た。私と明日香は目を合わせて、どちらからともなく軽快な笑い声を上げた。

第五章 その日……

いよいよ今日は二月十四日、授業の後のHR。ゴリアテが何かニヤニヤしながら言い出した。

「先生にチョコレートをくれる子がいたら職員室まで持ってきてくれな」

クラスは面白がってどよめいた。私はあげないが、ユツコらは用意してきたようだ。ゴリアテは男らしいのでもてるといえばもてるのかもしれない。まだ独身らしいけど。それよりも、私にはこの後の事が想像されて、心臓は既に暴走機関車の如く激しくなっている。さつきチラツと手鏡で見たら案の定リング病が発病していたけど、どうしようもない。もう、後は渡すだけなんだから。今年になつてから残念なことに席替えがあつたので、真治君は遠く廊下側のほうにいる。ふと、このクラス、2年2組になつた最初の頃が思い出された。

国語の時間、生徒に教科書を朗読させる時に、狩野真治君があてられた。はい、と立ち上がり、声変わりの途中ながら、大きな声で、軽く笑みすら浮かべながら、確か森鷗外の「舞姫」を読んでいた。難しい古語の文章なのに、よどみなく読んでいた。とても印象に残つたのは、目鼻立ちがはつきりしているな、と言う事だつた。最初はそれだけだつた。でも、いつしか私は真治君に興味を持ち、サッカー部であることや、どの辺りに住んでいるかとかも、知るようになった。そんな事を懐かしく思い出しているうちに、終業になった。

約束の場所、中学校を少し出たところの公園に、私は一人待つた。本当は明日香と一緒にいても良かったのだが、明日香には明日香の今日がある。ほとんど誰にも気持ち打ち明けていないので、頼る友達もいない。決心した私は、三日ほど前にメールで、今日チ

ヨコレートを渡したい、と真治君に伝えた。あっさり、わかった、三角公園に放課後行けばいいんだ、行く行くと言うような返事が来た。まるで忘れ物の傘を受け取りに来るかのような口調で、ちょっと拍子抜けした。が、ともかく、受け取ってくれるんだ、と納得し、添える手紙を書く事にした。が、その内容が決められない。好きだ、と書いてしまうか、それとも書かないか、悶々とした挙句、書かない事にした。勇気が足りないかもしれないが、どうせ告白するなら自分の口で言うほうがいいだろう、と言い訳を考え付いた。三日前の現在のテンションで鑑みた場合、私が言葉で告白する可能性はほぼ皆無なのだけれども、ともかくそう言う事にして、私はバレンタインの日を待った。

「いよっ」

真治君が、サッカー部の練習用の格好でやってきた。着替えてきたのか、と私は一瞬焦ったが、別に格好はなんでもいいか、と思いなおし、

「き、来てくれてありがとう」

と、蚊の鳴くような声で言った。何回か咳をし、声を出そうとする。

「こ、これ。受け取ってください」

「ありがとう。高そうな袋だね・・・こんないいものもらった事ないぞ」

言って真治君は快活に笑った。その目はずっと私を捉えて離さない。

「春休みに遊園地にも行こうぜ、またみんなでな！」

と言うと、さっさと来た道を引き返し始めた。あ、と思ったが、私はそれ以上何も出来なかった。でも、すごく嬉しかった。いつまでもそこに立ち尽くしていた。が、明日香の事を思い出して、慌てて学校のほうへ戻った。

合唱部に戻ると、既に練習は始まっていた。顧問の中村先生の痛い目線を浴びながら、練習に参加する。明日香のほうを見ると、向こうも見つめ返してきた。心なしか寂しそうにしている。何故だろう、と思ったがやがて理由がわかった。ケイジ君がいないのだ。休んだのかな、まずいな、今日いないと、チヨコが渡せないな、と思った。やがて、部活が終わった。明日香のところに行くと、先に明日香のほうから

「どうだった？うまく渡せた？」

と聞いてきてくれた。私は、うん、と返事し、でも告白はできなかったけどね、と言った。

「うん、ま、いいんじゃない？なんとなくでも伝わってるだろうし」マフラーを首に巻きながら明日香はため息をついた。今日渡したかったのにどうしよう、と言ったところだろう。

「しょうがないよ。今日学校も休んでたんじゃないのかな」

「ううん、確認に行ったけど学校には来てた。どうしたのかな」

不意に明日香がまなじりをあげた。よし、家まで行く、と言う。

「い、家。家知ってるわけ？」

「知ってるよ、加納町のスーパーの横のマンション」

調べてあるのはさすがだな、と思った。じゃあ私もついていくよ、と言う事で二人でケイジ君の住むマンションへ向かった。

「呼び鈴押して親が出たらどうしよう」

「忘れ物届けに着ました、とか嘘言えばいいんじゃない？」

「日が日だけにバレバレなんだろうけど、いいか。今日絶対に渡す、って決めてきたもんね。わざわざ高嶋屋にまで行ったんだしね」

「そう言えば綺麗な紙袋、ってびっくりされてたっけ」

私は、あの時の美人な店員さんの顔を思い出していた。ようやく目指すマンションに辿りついた。空は既に暗く、夕闇が街を支配しはじめている。

「あれ？あの人は？」

私が先に気づいた。横の駐車場から、二人の男の人が歩いている。

その一人は、背の高いケイジ君ではないか。

「そ、そうだね。あれ、どうしよう」

しかし、身を隠すような場所もなく、二人はそこで立ち尽くすしかしなかった。やがて、向こうがこちらに気づいた。

「倉沢、西野。何してるの？」

ようやく表情が見える距離で話しかけてきた。心なしか、元気がない。

「そ、あのね、うん。スーパーで帰りにジュースを買って帰る途中なの」

私のほうが精一杯の機転を利かせてこう答えた。肝心の明日香はほとんど石化していて何も答えない。

「啓二、先に帰ってるからな」

父親らしき人物は知り合いか、と言う顔をして先に行ってしまった。

「そう。今日部活休んじやったなあ」

「そう、心配してたんだよ、一体どうしたの？」

思わず明日香が本音を出してしまった。ケイジ君は、それには意を介さず、淋しそうに言った。

「お母さんが入院しちゃってさ。胃潰瘍らしくて、手術するかもしれないんだ。それでお見舞いに言ってた。」

「そうなんだ」

三人とも言葉が続かない。私たちはこんな時何を言ったらいいのかわからないのだった。

「じゃ、またな」

と、ケイジ君は肩を落とし、立ち去ろうとした。そこで明日香が普段の明日香らしい振る舞いを見せた。

「待って！」

と言って、強引に手にあの紙袋を渡した。

「これ受け取って！後、お母さん、絶対によくなるから。じゃあね！」

と言うと、驚いて目をしばたかせているケイジ君を尻目に、すごい勢いで歩いていく。私も慌てて後を追う。彼のほうを見ると、きよんとはしているものの、少し嬉しそうに笑っていたのが見えた。私は思わず彼に手を振った。ますます辺りは暗くなってくる。明日香は私と手をつないで顔を赤くしている。勢いで渡しちゃったわあ、なんて言っている。真冬のさなかでも、今日の二人には寒さは気にならないのだった。夜空には星が瞬きだしている。遥か彼方から、二人の前途を仄かに照らすかのように。

第六章 明日香の幸せと、私の寂しさと

バレンタインデーからしばらく経ったある日、私は明日香からあるニュースを聞いた。二人放課後の寒空を凍えながら帰る途中の事だ。

「知ってる？六組の相沢さんも、真治君にバレンタイン渡したって事」

「え？知らない。相沢さんて、あの学級委員やってる？」

「そうよ。結構整った顔してるよね。恵理のライバル誕生ってところかも」

私は結構な衝撃を受けた。恋敵の存在など、今日の今まで考えた事もなかった。思わず思考停止して、何も言えずにいた。明日香が言葉を継ぐ。

「でも、別に付き合ったりはしてないらしいよ。友達ぐらいの距離らしいよ。メールとかやり取りしてるとの事」

「誰に聞いたの？」

思わず強い調子で聞いた。嘘ならどれだけいいことが、と思っていた。

「ユウコよ、合唱部の。ああ、もちろん恵理の気持ちとかは言っていないから。ただの噂話」

出来れば聞きたくなかったような、でも知っていたほうがいいよ。うな。思わず携帯を無意味に取り出してしまふ。

「どうするの？真治君に直接確かめる気？」

「まさか。そんな勇氣はどこにもないよ。ただ、なんとなく取り出しただけ」

「ともかく、要注意よ」

「要注意って、どうすればいいわけ？」

二人は思わず顔を見合わせた。どうすればいいかわからない。遠くの空でカラスが鳴いた。なんともいえない不安が空を遮る灰色の

雲のように私の胸を覆うのだった。

あくる日、私は早速二年六組へと「偵察」に出かけた。それとなく前の廊下を通る。いた。相沢真帆さん。髪の毛をショートで切つて耳にかけている。背は割合高い。顔立ちもはつきりしていて、美人の部類だろう。恋のライバルと思うと、余計に相手が魅力があるように思えるから不思議だ。情報によると親は医者らしい。だから知らないけれども、成績も非常にいいらしい。などなど、相沢さんの事を知れば知るほど自信が無くなるのだった。私のとりえなんて、人並みより少し上の歌唱力ぐらいしかない。肩を落としてクラスに戻る。もうすぐチャイムが鳴るので席に着き、そつと真治君のほうを見る。なにやら漫画本らしきものを熱心に読んでいる。何かに集中している男の人の顔は魅力的だ。あんな感じで、私のことも見つめてくれたら………という空想はゴリアテの大声でかき消されるのだった。

もう終業式も近い。このクラスのみんなともお別れなんだなあ、と、ほんの少しだけ寒さのましになってきた事が分かる季節になって実感する。と言つても、まだ来年も一緒の学校なので、そんなにセンチになることもない。でも、最後にまたみんなでどこかに遊びに行きたいな、と思つて、合唱部に行く途中で明日香にそう言つてみると、うんうん、と生返事を返してくる。見れば必死に何かしらのメールを打っている、と言つか読んでいるので、邪魔したか、と思つて黙つて横を歩く。ふと、明日香がこちらを見る。

「今日ね、悪いけど一人で帰ってくれる？」

「いいけど、どうして？」

一瞬明日香は言うか迷つたようだが、やがて決心したように説明を始めた。

「ケイジ君が、二人で帰ろうつて言ってきたの。何か今日話したい事があるんだって」

「はあ、と私は思わず笑みを浮かべてしまった。

「あら、随分と上手くいってるじゃん」

「うん、どうもね、メールの雰囲気だとお母さんが無事退院したのかな、て感じ」

「それならいちいち二人で帰らなくてもいいじゃん」

「言ってから、私は、自分が『排除』される事に不愉快を感じている事に気づいた。明日香もなんとなくわかったらしい。

「ごめんね、今日だけだから、ね？」

私も反省し、うん平気よ、と返したが、どうにも心が寂しく感じて仕方なかった。その後の練習もろくに身が入らなかった。そして、練習が終わり、私は一人暗い街を帰る事になった。なによ、明日香だけ順調でさ、ふん。と、私は子どものような八つ当たりをした。本当は、それが道理に適っていないことがわかってる。だからなおさら寂しいのだ。いつもいつも明日香と一緒に。離れ離れなんて考えられない。もし、今後も毎日一人になったらどうしよう。私は、ふいに走り出した。なによ、私は寂しくなんかないもん、と何度も心の中で連呼していた。

第七章 眠れない夜も

月の美しい夜だわ、などと私は詩人気取りでつぶやいてみて、恥ずかしくなってカーテンを閉めた。でも、またすぐカーテンをもう一度開いた。今日の満月は本当に魅力的で、何故か見つめずにいられない。それに、夜空の星も今日は一際輝いて見える。それだけではなく、夜も更けた時間、高台にある私の家からは輝く宝石箱のようなネオンの街並みも見える。私はこの景色が大好きで、何回も携帯で撮影した。夜の奥底が静かに冷え込んでいる。私は、ここに一人でいる、と感じる。一階にはお父さんもお母さんもいるし、隣の家にももちろん誰かが住んでいる。でも、今の私は孤独そのものだと思う。目を閉じてみると、密かにあの人の事が思い浮かばれて、胸が締め付けられる。恋は不思議な魔法にかかったようなものかな。胸が高鳴って、明日の希望が湧いて、それでいて酷く不安だし、時には感情が高まって抑えられなくなる。そして、何よりも辛いのは、報いがある保障が全くないこと。勝手に私が想いを募らせても、相手がそれに応えてくれるかなんて全く確証がない。でも、それでもみんな恋をするんだね。今度こそ私はカーテンを閉じて、ベッドへと潜り込んだ。柔らかい毛布に包まれて、私は夢をはじめめる。その中では私は真治君ともう付き合っているのだった。手をつないだり、抱きしめられたり、と言う、誰にも言えないような妄想を飽きもせずには楽しんでいっていた。やがて、まどろみ、眠りの世界へと落ちていく。

もう、終業式が近い。と言う事はホワイトデーも近い。このクラスともお別れだ。私は一人ため息をついてばかりいた。明日香はあの日以降、これまで通り私と二人で帰宅してくれているけれども、話の中身はケイジ君とどうのと言う話ばかりで、のろけはもういいよ、なんて思わず本音を言ってしまう有様。二人は、すごい速さで

接近して、あつという間に付き合いだしたのだった。私のキツイ嫌味も、幸せ満開の明日香には気にならないらしく、構わずに話を続けるのだった。暖かい風が吹いてきた。もう、春なんだね、と口にしてみた。明日香は言った。恵理にも来るよ、きつと。気休めにしか聞こえないので、またため息をつくのだった。

何も打たなければ、真治君からメールが来る事はまずない。でも、打てば必ず何かを返してくれる。それも結構早く。今日も私は些細な事をメールで打ってみた。でも、おかしい。全然返事が来ない。何度も携帯をいじり、新着メールを受信を繰り返す。その度にメールはありません、になる。携帯をその辺にぶん投げる。膝を抱えてテレビに見入る。みんな幸せそうだな、私一人が全世界で一番不幸な人間のように感じる。テレビを消して、お風呂に入ることにした。もちろん、さつき放った携帯は持つていく。返事が来るかもしれないから、と言う事でお風呂にまで持つて入る。冬頃に少し太った体は、少しは減らしたものの、以前太もなどに肉は残っている。でも、お母さんはそれぐらいでいい、と言っているからまあいいか、と思っている。桃の匂いのする入浴剤を入れて、バスタブに沈み込む。まだ返事が来ない。もっと大事な内容を打てばよかったかな。でも大事な用なんてないんだよね。その時、メールが来た。思わず湯船に落しそうになり、慌てて掴みなおす。真治君からだ。内容は、ホワイトデーの事だった。バレンタインの日と同じ場所でお返しを渡してくれる、との事。思わず私は嬉しさで声が出そうになった。と言うか実際に出了。何度もメールを読み直し、ゲンキンなもので、すっかり上機嫌になって、明日香に報告メールなど打つのだった。

夜になり、また、蒲団の中で色々考える。最近考え事が増えたみたい。哲学者になれるかしら、などとどうでもいい事を思いながら、ホワイトデー、三月十四日の事を考えてみる。何をくれるのかしら

？無難にマシユマロかな？それとも、何か違う物をくれるかしら？性格上、そんなに気が利くタイプじゃないのはわかってるので、大して期待はしない。それよりも、私のことをどう思っているか、とかが聞きたくて仕方ない。クラスでの評判をそれとなく聞いても、全然恋愛に関心がないタイプらしく、誰が好きだとかそんな噂が全くない。もちろん、あの六組の子なんかも眼中にないらしい。では、私はどうなんだろう。曲がりなりにもバレンタインあげたのよ？こんな引っ込み思案の女の子が。と、私は段々押し付けがましい嫌な子になってきた。その時点でもう考え事は嫌になったので止めて、買ってきた漫画を読む事にした。そして、明かりを消して眠る事にした。でも、すぐには眠れずに悶々とあれこれ考えてしまう。そんな日々を繰り返し、私はホワイトデーを迎えることになるのだった。

第八章 Believe

三月十四日、私が不安と期待で胸を痛ませながら登校すると、真治君が堂々と私のところへ来た。ま、まさか、と思っていると、今日待ってるよ、とだけ言つて、二カツと笑つて踵を返した。その笑顔が余りにも素敵だったので、私の放課後への不安が全く消えうせ、いつものごとく授業など聞かず、想像力たくましくあれやこれやと思いをめぐらすのであった。

遂に放課後になった。メールを読み返すと、バレンタインの日と同じ場所で、時間指定は特にはない。とにかく、急がなきゃ、と小走りに敷地外の公園に急ぐ。小さな公園なので、誰がいるかはすぐにわかる。子連れの奥さん二人が、ベンチで賑やかに話をしている。子ども二人は、砂場で山なんて作っている。と、その向こうに、同じ制服を着た誰かがいる。目が合ったが、見た事のない顔なので、後輩だろう。あの子も同じくお返しを待ってるのかしら、と思うと仲間がいる、と感じ心強かった。でもそれは私が勝手に決めてるだけだ。クスツ、と笑った時、向こうから真治君が大またでやってきた。今日も練習着に着替えてくるのかと思ったら、まだ着替えていない。今一人で笑ってたのばれたかな、と思つて、あたふたしてしまった。が、もう逃げ場もないので開き直つて微笑みかけることにした。真治君も顔を崩した。普段見ない表情だわ、と思つた。「お待たせ。ここなら誰にも見られないな・・・おや」

真治君が向こう側にいるあの後輩女性に気づいた。戸惑っている。「西野、ちょっとあっち行こうぜ」

出口のそばにあるすべり台の向こう側に歩いていく。着いていきながら、手に持っている紙袋が見えた。結構「上等そうな」袋だ。

「これ、お返し。フフン、きれいだろ」

「ありがとう。ブランドものの袋ね」

「そう、リリエン・ブルドッグだぞ」

「えっ。リリエン・ベルグじゃない？」

すると真治君はたちまち顔を赤くして、そ、そうそれそれ、と言いながら私の手に渡した袋の「Lilienberg」のつづりを目で追いかけている。思わず私は噴出し、真治君も舌を出して笑って、実は姉貴に連れられて買いに行ったんだよ、だから店名も覚えられなかったんだ、と弁解した。

「西野」

空気を変えようと、真治君は表情を無理やり引き締めた。

「もうすぐクラス変わっちゃうな」

「……そうだね、寂しいね」

こう言う時には思わず本音が出てしまうものらしい。私は素直に言ってしまった。

「西野が隣の席のときは楽しかったなあ。何言っても笑ってくれただろ」

「だって、狩野君面白いんだもん」

本人にはさすがに下の名前呼びかけられない。

「西野さ」

真治君がグッと顔を近づけてきた。私の心拍数が一気にあがった。「今度、二人でサッカーの試合見に行かないか。千場マリンスタジアムでジュビロ磐田の試合があるんだ」

と言うと、ポケットから二枚のチケットを出してきた。一枚を私に差し出してくる。

「この頃はもう春休みだし、大丈夫だろ？ 親戚のおじさんがたまたま贈り物でもらったものを俺にくれたのさ」

私は五回ぐらい首を縦にふった。何か言いたいんだけど、言葉が出ない。

「よし、じゃ決まりな。細かい事はメールでまた決めよう」

と言うと、私の開いている左手にチケット一枚を握らせて、ポンと叩いた。

「んじゃ、部活行くかあ。今日も走るぜえ」

今日は一緒に並んで学校へ戻った。私は頬を触ってみた。真つ赤に違いない、これはいけない、でもどうしようもない、しょうがないのでひたすらうつむいて歩いた。真治君は、その様子を伺いながら、Jリーグの観戦に行くんだから顔に何か書いていこうか、とか楽しそうに言ってくる。そそ、そうね、なんて言いながら、はじめての二人歩きは終わった。

その日の夜、私の報告を受けた明日香が家に飛んできた。またお母さんも混じりたがるが、無常に追い出して、今日の顛末を改めて説明した。

「えらいこっちゃ、これはデートじゃないの」

真治君にもらったJリーグの観戦チケットをまじまじ見つめながら、明日香は何度も私の肩を叩く。痛い、と言うと、大笑いして、ね、言ったでしょ、春は近いって、と言う。何か裏情報持ってたの？と聞くと、何も、と当たり前のように答える。チケットを取り上げて、大事に机の引き出しにしまう。

「千場までなら電車だけでも一時間ぐらいかかるね。その間二人きりだ、いいね」

「今日もでもりんご病が発症したのよ。これどうにかならないかな。すごく恥ずかしいんだけど」

「お化粧でもしていったら？」

「そんなのした事ないよ。あ！服を買わないと！ねえ、今度買いに行くの付き合ってよ」

「別にいいよ。サッカー観戦だったらあんま小奇麗にしてもどうかとおもうけど」

その後も私と明日香はああでもない、あれはこうだと色々相談した。青天の霹靂、と言うような展開で、ついに私は片思いの人とデート？出来る事になった。その日も蒲団に包まって、いつまでもその日の事を想像している私なのであった。

第九章　せつなさの贈りもの

中学二年生は終わり、暖かい風が吹く春がやってくる。そんな春休みの一日、私は狩野真治君と二人で、千場県にある千場マリンスタジアムへＪリーグの試合を観戦に行った。待ち合わせはお昼の一時だった。朝は六時に起床した私は、全く落ち着きもなく、何度も服を着替えては皺を確認したり、歯磨きを二回もしたり、髪の毛をいったり、テレビを見て気を紛らわしたり、ネットで今日の対戦チーム、ジュボロ磐田とサンフィラツチエ広島の選手の名前を覚えてりして過ごした。お母さんには正直にありのままに話し、お父さんには黙っててね、と言ったものの、守られるかどうかは知らない。別に悪い事をしに行くわけではないからいいんだけれども、どこか不安感もあったが、お母さんは含み笑いで、気をつけていくのよ、遅くても九時までには帰るのよ、携帯忘れないでね、などと言って、私の服装のコーディネートなどをしてくれたのだった。

待ち合わせの駅前についた。うららかな行楽日和だからか、いつもより人が多いように感じる。まだ真治君は来ていない、と思っただけ。向こうからやってきた。その格好はサポーターの鏡のようで、ジュービロのユニフォームを着て、持っているリュックから旗のようなものが飛び出している。さすがに顔にペイントはしていないかったけど。

「お待たせ。ちょっと遅れたかな、ごめん」

「うっん、全然待ってないよ」

思ったよりは緊張せずに話せる。真治君がリラックスしているからだろうか。

「そう？じゃ、行こうぜ」

二人仲良く並んで切符を買い、目指す千場へ向けて快速急行に乗る。電車内は混んでいたのも、座るところではなかった。

「覚えてる？去年の夏みんなでスカイウォーカープールに行った時の事」

「うん。あの時は本当にすごい人ばかりだったね」

「みんなはぐれないかとヒヤヒヤしたよ。全然泳げなかったな、アハハ」

私は、あの時真治君が私のダサい浮き輪の紐をしつかりと持っていてくれていた事を思い出して、少し嬉しくなった。

「今日の試合は盛り上がるぜ。天敵の2チームだからな」

「仲悪いんだってね、ネットで見たよ」

「選手同士というか、サポーター同士が悪いみたいだな。それに、どちらも実力があるチームだから、そう言うのもあるだろ」

ここまで言って、じっと私を見つめてきた。頬がやっぱり高潮してしまう。

「でも心配はいらないぜ。何かあっても俺が守ってやるから」

と言って、胸をドンと叩いた。なんて頼もしい、と思った。よくある童話のお姫様って、こんな気持ちで正義の騎士を見つめるのかしら、などと思ってしまった。

あつという間に降りる駅に着いた。思わず、もう着いたの？と口にしてしまった。好きな人という時間は、経つのが早いのかもれない。電車を降りる人たちの大半が千場マリンスタジアムに向かうようだ。既視感、デジャブを感じた。スカイウォーカープールと同じだ、と思ったら、真治君が体を寄せて、私を守るように歩いてくれる。これならはぐれないな、と私はそっと体を預けた。

「みんなすごい格好だな。西野ちよつと浮いちゃってるかもよ」

「そうみたい。みんな顔にペイントしたりユニフォーム着てるね」

「でも、今日の服はすごい可愛いな」

と、褒められて間違いなくリング病発症だろうけど、人ごみの暑さのせいと言うことにするために、暑いね暑いよなどと連呼した。

「じゃあジュース買おう。あ、中に入ってからにするか」

行列に並びながら、真治君はそう言った。確かに、何かおやつなどを買っておきたいところだ。

「うん、じゃあ中で何か買おうね」

しばらく並び、ようやく入場できた。思った以上に広い。サッカーって、こんなに場所使ったんだ、と感心していると、真治君は指定席を見つけた。そして、場所はわかったから、あそこの売店で何か買おう、と言う話になって、飲み物やポップコーンなどを買った。いよいよグラウンドに両チームの選手が出てきて、スタジアムは俄然盛り上がった。

「すごい歓声ね」

「おう、高原がいる！たかはらー」

と真治君が大声で呼んだ。残念ながら聞こえなかったようだけど、選手をじかで見る事に満足しているみたいだった。

ホイッスルが鳴って、試合が始まった。私たちのスタンドは、ジユボロ磐田側の応援席だ。ファンが、太鼓を叩いたりトランペットを吹いたりして一生懸命応援している。真治君もリュックからメガホンを取り出して、叩いて調子をとっている。

「あー、押したら駄目じゃん」

サンフィラツチェの選手が反則をした。走っている時に足をかけると、すごい勢いで転倒してしまう。

「痛そう……」

「痛いよマジで。ボールにいけないとな」

真治君の目がギラギラと輝いている。いつか見たあの目だ。練習試合で負けて悔しがっている時の。その後のフリーキックで、見事ジユボロが先制を決めた。

「いやったぜ！」

と、真治君が私の手を握って喜んだ。私ときたら気が遠くなりそうになって、慌てて頬の汗をハンカチで拭いた。何しろスタジアムの熱気だけでもすごいのに、ぴったり横に真治君がいるのだ。段々

頭の中が白くなってきた、その度に気合？を入れなおした。試合は白熱の展開で、前半を終わって3 - 3と言うタイスコアだ。私はトイレに行かせてもらった。そして、後半が始まると、今どは一転して、こう着状態が続く。入りそうで入らないシュートの応酬が続き、手に汗握る展開だ。真治君はいけー、うおおーなどとエキサイトしている。結局、その点数のまま、PK戦になった。

「胃が痛いな。今日の試合は」

と、思わず真治君がばやくほどの熱戦は、最後にサンフィラッチエの選手がシュートを止められ、最終的にジユボロが制した。応援席の盛り上がりと言ったら、お祭り騒ぎどころの話じゃなかった。真治君も立ち上がって喜び、私も立って拍手して選手を称えた。そして、マイクの挨拶が終わり、お客さんは少しずつ帰り始めた。応援歌の合唱も始まったが、歌を知らないので歌えないでいると、真治君がよし、じゃあ帰ろうか、と言ってくれたので、私たちはスタジアムを後にする事にした。お、その前に、と真治君が携帯を取り出し、いきなり二人を写メで取った。顔と顔がくつつくぐらい近づいたので、私は驚いた顔を撮られてしまった。真治君はそれを見て嬉しそうに、写メを私の携帯に送ってきた。私も嬉しくなって、思わず、真治君と手をつないだ。それも私のほうから！これもスタジアム効果に違いない。私たちは、最後別れる時まで、ずっと手をつなぎっぱなしだった。切符を買う時だけ離れたけど、その後もまた自然に手をつないでいた。今日の試合の事、クラスのこと、進路の事、趣味の事、ずっと途切れなく会話が続いた。

そして、あつという間に地元の駅に着いた。その時、私は胸が締め付けられた。もうお別れか。次会えるのはいつなんだろう。夕暮れの街並みに私達の影が長く伸びる。どちらが話すでもなく、自然と二人は大通りに面した噴水のある公園へと向かった。そのベンチに腰掛けた。

「今日はありがとな、西野と行けて楽しかった」

「私も、狩野君に誘われて嬉しかった」

真治君は、体ごとこちらに向けて、真剣な、睨むようなまなざしで私を見た。

「お、俺達って仲いいよな」

「う、うん、仲良くなりたい」

とつさの事で会話のキャッチボールが出来なかった。が、構わず真治君は続ける。

「俺、西野と、付き合いたいんだ」

え？本当に？私の全ての機能は停止し、何も言えない。言いたい事が何かすらわからない。夢を見てるのかな。

「駄目だよな、こんなサッカー馬鹿じゃな」

「そ、そんなことない」

ようやく意識？を取り戻した私は大きな声で言った。

「わ、私でよかったら」

喉から必死に声を絞り出した。ちゃんと答えないと、誤解を招いてしまう。と思いつつも、頭の片隅に、この調子じゃ私の気持ちなんて全く気づいてなかったんだ、という思いがかすめたのだった。

「本当か。そうか、うん」

と真治君は安心したような声を出した。どうやら、向こうは向こうで同じように苦悩していたみたい。私は心から嬉しくなった。

「また、カラオケに行こう。西野、恵理の歌が聞きたいんだ」

「うん、行こう。私も、狩野、真治君の歌が聞きたい」

二人は同時に微笑んだ。初めて下の名前で呼んじやった。夕闇が迫る公園で、私たちは手をつないだまま、名残惜しく、いつまでもいつまでも湧いては沈む噴水を見つめていたのだった。（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2762g/>

空、晴れあがった2 ～せつなさの贈りもの～

2010年11月12日16時40分発行